

巻頭言

## コロナ時代の地域研究

高倉浩樹 (センター長、教授)

武漢市でコロナのニュースが話題になり始めたのは今年1月だったと思う。半年後にここまで世界的な影響になるとは想像だにしていなかった。自分の研究に関わり3月に東京で北極域研究の国際会議を予定していたが、主催委員のメンバーと激論の末に実質的に中止となったのは2月上旬だった。その頃は夏以降、あるいは秋になれば、元に戻るだろうと楽観視していたが、現在においてはさらに将来予測が難しくなっている。

大学も大きく変わった。授業はほぼすべてオンライン授業になり、課外活動も停止されている。確かに授業は提供できていると思うが、大学の機能は教育だけではない。世代を超えた新しい出会いによる異種混交の化学反応が新たな知を作り出し、社会を活性化することにある。4月入学者はどのような思いでパソコンに向かっているのかと想像すると、教員としては申し訳なくなる。

とはいえ、オンライン化には肯定的な側面も多々あることを実感している。少人数のゼミなどはむしろ活性化し、遠方に暮らす社会人院生が毎週ゼミに参加するなど空間を越える交流が可能になったからだ。5月には会員2,000名を超える学会のオンライン年次大会に出席したが、大変盛況だった。共同研究に関わる研究会活動もオンラインで意外なほど上手くいっている。最近ではオンライン会議に録音機能があるので、出席できない場合それを後で、しかも二倍速で聞くということもできた。限定的ではあるが時間も越えた交流が可能となっている。

問題なのは地域研究の柱である現地調査に出かける見



誰もいないキャンパス

込みが立たないことである。専門分野によっては国内の調査を比較で行う場合もある。ただロシアや中国、モンゴルの現場で得ることのできる生の声や研究資料にどうやってアクセスするかの見込みは立っていない。当初は、現地の共同研究者に依頼して社会調査をやってもらうなどの対策を考えたが、依頼してみると当の彼らが感染対策で調査に出られないという。

現地に行けない中で地域研究をどう進めていくか、これは大きな課題である。文献や標本資料を含めたデジタル資料化の必要性、サイバー空間を調査対象にする方法など模索しないといけない領域は多い。これは長期的な課題であり同時に短期的な解決が必要な実践的問題である。というのは地域研究で学位を取ろうとする大学院生にしてみれば、博士論文のデータをどう得るかは、より一層切実だからである。

地域研究が大きな岐路に立っているというのが実感である。



### contents

- 1 巻頭言
- 2 私の東北アジア研究
- 3 新任ごあいさつ／著書・論文紹介
- 4 活動風景

新型コロナウイルス禍により外国人の着任、海外調査、研究会集が不可能であるため、今号は4頁立てでお届けします。

## 私の東北アジア研究

## 武士の「家」からみる江戸時代

～コロナ危機下の近況をまじえて～

藤方博之

上廣歴史資料学研究部門／助教



## 社会の基礎単位だった「家」

私は、江戸時代の大名に仕えた家臣たちの「家」に着目し、その存続をめぐる人々の行動と意識の分析を通して当時の社会を考察している。「家を継ぐ」「家が絶える」といった表現は、農家や老舗など代々続く家業があるお宅を除けば、現代日本に生きる私たちにとってなじみの薄いものになっているといえよう。しかし江戸時代では、多くの人々は「家」に属し、「家」が基礎単位となって武家、村、町といった身分集団が形成されていた。父子直系で継承される「家」は経営組織でもあり、その存続は生業の維持に直結していた。加えて、親孝行や祖先祭祀が重視される当時においては、父祖が受け継いできた「家」を危うくする行為は、道徳的・宗教的に不可とされた。

政治権力を掌握する將軍家や大名家は、個別の武士の「家」が主従関係によって結びついた集合体といえる。戦国時代と比べて主君の家臣に対する支配が強まった江戸時代、主君は家臣の「家」を存続させる責務を負うことにもなった。

## 利用する古文書

これまでの分析でよく用いたのは、家臣の家譜である。家譜の一般的な形式は、親族関係を示す系線で人名の間を結び(系図)、各人名のところに履歴を掲載したものである(写真1)。履歴の部分には、その人物が元服(成人)して、主君への奉公を始め、家督を継ぎ、役職に就き、ときには昇進・降格を経て、隠居または死没するまでが記録されている。男性当主中心の、奉公の履歴という限られた情報とはいえ、家譜を読む私の目の前でさまざまな武士の人生が繰り返し展開しては終わってい

く。大部分は無味乾燥な内容であることは否めないが、まれに興味深い記述に目がとまることがあり、考察の素材となる場合がある。

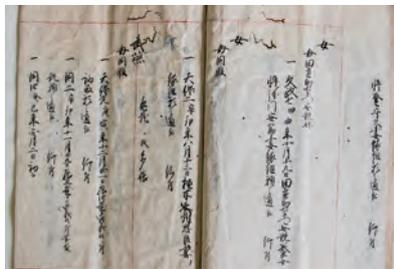


写真1 家譜の例(熊谷家文書)。佐倉藩重臣の家で作成されたもの。藩庁編集のものより女性の記述が多い。

## コロナ危機と古文書調査

分析の対象となる古文書は、資料館・博物館などで保管されているものを利用することが多い。コロナウイルスの感染拡大により、一時期はどこの館も閲覧困難になった。6月以降は業務を再開する館がでてくるようになったが、いまだ休館したままのところもある。私自身も困っているが、修論・卒論を抱えた大学院生・学生にとってはより深刻である。

民間に伝わる古文書を調査することもあるが、3月以降は複数の調査を延期せざるを得なかった。所蔵者と半年以上折衝を続け、ようやく調査に着手するところまで話が進んだ古文書群も、再開の見通しが立たないままである。感染が落ち着いたとしても、現場での作業(写真2)を従来のように

ふじかた・ひろゆき 埼玉県出身。千葉大学大学院社会文化科学研究科博士課程修了、博士(文学)。日本学術振興会特別研究員(PD)などを経て現職。日本近世史、家族史を専攻。



写真2 古文書調査の光景(宮城県加美町、2018年12月)。所蔵者のお宅での整理作業。防塵のためにマスクをつける人も。

実施してよいのかという不安も残る。調査方法は多少の修正を迫られるかもしれない。

## 思索の期間に

このごろは、撮りためていた史料画像を解説するなど、外出せずにできる作業に取り組む時間が少しだけ増えた。報道はじめ種々の情報に接していると、コロナウイルスは政治・経済・医療などが抱えていた諸問題を世界各地で顕在化させながら拡大していったようにみえる。日本の出来事で私が目をひかれたのは、事業者に対する補償無しの休業“要請”や、感染者への冷たい姿勢といった自己責任を追及する風潮である。江戸時代と直結させることは慎重であるべきだが、当時の集団のあり方や(「家」存続のための)扶助の規範が、まったく断絶しているのか、どこかで影響を残しているのかということ、史料や先行研究にあたりながら考えている。歴史とは「現在と過去の間の尽きることを知らぬ対話」(E.H.カー)という言葉が改めて思い浮かぶ。現代と比較するためには、過去を明らかにする必要がある。活動範囲を限定せざるを得ない状況が続くようだが、体調に気をつけながら作業と思索を続ける期間としたい。

## 石器に残る痕跡から人類の活動を読み解く



寒川朋枝

ヒトと地球の相互作用の変遷史に関する研究ユニット  
／学術研究員

さんがわ・ともえ ▶香川県高松市出身。鹿児島大学大学院人文科学研究科考古学専攻修了。前職の鹿児島大学埋蔵文化財調査センター特任助教などを経て、現職。

2020年6月より、東北アジア研究センタープロジェクト研究部門ヒトと地球の相互作用の変遷史に関する研究ユニットの学術研究員として着任しました、寒川朋枝と申します。専門は先史考古学で、主に後期旧石器時代の石器群を対象として、石器使用痕分析を中心に研究を進めています。

石器使用痕分析は、石器の機能を明らかにするだけでなく、多くの可能性があります。例えば、従来行われてきた石器編年研究や石器製作技術に関する研究などに加え、新たに石器使用痕分析の視点から再検証することで、集落内での空間利用の様相や、より具体的な集団の動態に迫ることができ、新たな解釈を提供できることもあります。

私の前任地が鹿児島大学であったこともあり、九州地域をこれまで主なフィールドにしてきましたが、例えば後期旧石器時代末期の細石刃という小さな石器に残された使用痕を観察すると、九州内でその機能に地域差があることが分かってきました。この現象は、該期の人々の適応性を示す一事例と言うこともできます。この石器機能に認められる地域差の背景については、石材環境や動植物相などの要因を想定していますが、今後さらにデータを収集して検討を重ねていきたいと考えています。そしてこれまでの経験と、さらに広い視点をもって、プロジェクトが円滑に進むよう尽力していきたいと思っております。よろしくお願ひ致します。

## BOOKS

著書・論文紹介

## RECENT PUBLICATIONS



### われわれが災禍を悼むとき

—慰霊祭・追悼式の社会学

福田雄

慶應義塾大学出版会 2020年3月刊

text: 福田雄 (ノートルダム清心女子大学)

災害や事故、戦争のあとに行われる慰霊祭や追悼式の現代的特質は何か。本書は、東日本大震災やスマトラ島沖地震、長崎市原爆といった災禍をめぐる執り行われる記念行事のフィールドワークをもとに上記の問いを明らかにする。その際、著者が焦点を当てるキーワードは苦難である。災禍はしばしば苦しみの意味をめぐる問いをわれわれに突きつける。「なぜこの出来事がわれわれに起きなければならなかったのか」「どうして彼らは死ななければならなかったのか」。慰霊祭や追悼行事は、これらの問いと向き合う場の一つであり、本書はこの観点から今日の社会の一側面を明らかにする試みである。なお本書は、指定国立大学災害科学研究拠点の支援を受け出版された、東北アジア研究センター災害人文学研究ユニットの研究成果の一部である。



### 北極の人間と社会

—持続的発展の可能性

田畑伸一郎・後藤正憲編・高倉浩樹  
ほか著

北海道大学出版会 2020年3月刊

text: 高倉浩樹

本書は、東北アジア研究センターが参画した文科省補助事業北極域研究推進プロジェクトの成果である。北極の気候変動は、国境を越えた研究者・政府・企業がその行方に着目している。気象現象は当然ながら人間の生活に左右するわけで、その影響をまとめたのが本書である。目次は「持続的発展を目指して」という総論の後、北極の経済開発として「北極海航路」「石油とガス」「漁業」がある。さらに環境と人間の相互作用として「凍土と文化」「変化と適応」「先住民とモニタリング」と続く。最後は北極のガバナンスとして「国際関係」「北極評議会」「国際法に基づく秩序づくり」「開発と先住民族」である。北極域研究の入門としても薦めたい。

## 遠い親戚・バイカル湖にて

千葉聡

(地域生態系研究分野／教授)



1

バイカル湖畔の住人であるブリヤート族には、イザナギ・イザナミ神話とそっくりな国生み神話があるという。だが本物の海からは遠く隔てられた彼らにとっての「原始の海」が意味するのは、きっとバイカル湖に違いない。その湖畔に繰り返し打ち寄せる波は、確かに静かで清らかな海辺の気配を漂わせる。

バイカル湖は成立以来2000万年以上の歴史をもつ。長期に渡る進化の歴史ゆえに、そこに住む7割近くの生物はそこで独自の進化を遂げた固有種である。私たちの研究チームは2012年から、このバイカル湖の生物相調査を行ってきた。チームのメンバーは、私と研究室の学生たち、ロシア科学アカデミーの研究者、それに専属ダイバーである。

私たちの調査は波打ち際で網を使って動物を捕獲するほか、チームのダイバーが潜水し、湖底から試料を採集するという方法で行う。浅瀬の石をどけると、無数のエビのような動物が泳ぎ回る。これはバイカル湖固有のヨコエビ類である。ダイバーが湖底から引き揚げてきた岩を見ると、その表面に緑色の苔の塊のような海綿と、夥しい数の巻貝が付着している。私たちは湖岸でダイバーが採取してきた岩や動物を、容器の中で選別して、必要な試料を確保、固定する。小さいが驚くほど多様な生物が見つかるので、この作業はなかなか手間がかかる。

私たちの調査の結果、意外なことにバイカル湖の巻貝類のなかに、日本の琵琶湖の巻貝類と非常に縁の近いものがあることが判った。ミズシタダミ類やヒラマキガイ類と呼ばれるタニシのような姿の巻貝の仲間である。分子遺伝学的な解析の結果、琵琶湖の仲間とバイカル湖の仲間は、数百万年ほど前に分かれたことが推定された。恐らくバイカル湖は過去に極東ロシアのアムール水系とつながった時期があ



2

り、その時期に祖先が東に移住したのだろう。さらに氷期に日本列島が大陸と接続した時期に、北から日本列島に移住して琵琶湖に達したのだと思われる。琵琶湖には、バイカル湖の生物と共通の祖先から分かれたと考えられる生物が他にもいる。バイカル湖の浅瀬を泳ぎ回っているヨコエビ類の「親戚」が、琵琶湖の湖底の最も深い所から見つかっているのである。実は無脊椎動物の一部に注目すると、琵琶湖はバイカル湖の「親戚」とも言える存在なのである。日本の淡水生物相の起源を考えるうえで、バイカル湖の生物相の調査は重要な鍵を握っている。

さて調査チームに、子供の頃からバイカル湖にあこがれ、私の研究室に所属してその夢をかなえた学生がいた。面白いことに、彼は偶々地元のブリヤート族に見かけがそっくりで、バイカル湖での調査活動の期間、しょっちゅう彼らと間違えられた。観光で来る中国人を見慣れている地元のロシア人が、見間違えるほど似ていたのである。もしかすると遠い過去に、私たち日本に住む人々とブリヤート達の間に、なにかしら交流があったのかもしれない。湖畔で動物採集に夢中になっている彼の姿を眺めつつ、そんな空想を抱いたものである。

1: バイカル湖にて調査中  
2: 準備中の調査チーム

### 編集後記

1960年5月にシベリア上空で米スパイ機U-2が撃墜されて米ソ冷戦の「雪解け」が頓挫し、1962年10月のキューバ危機において世界は核戦争寸前に至った。まさにその間の時期に我が国でポリオの大流行があったが、1961年6月、ソ連から緊急空輸された生ワクチンが一举にこれを鎮めた。当時のウイルス研究者たちと日ソ両国の当局者の英断を讃えたい。(柳田賢二)



東北アジア研究センターは、文理連携・学際的なアプローチによって、シベリア・モンゴル・中国・朝鮮半島・日本における歴史・社会・自然を総合的に捉えることをその使命とする研究所型組織です。

東北大学東北アジア研究センター  
ニューズレター 第86号

2020年9月30日発行

編集：東北アジア研究センター広報情報委員会  
発行：東北大学東北アジア研究センター  
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41  
TEL 022-795-6009 FAX 022-795-6010

Facebook  
をチェック!

